



1968年当時、道内中心で活躍されてる「小さき兄弟会」の集合写真。
神居教会献堂式当日又は前後に撮られた写真と思われる。

一九六〇年以前、札幌北十一条教会のフランシスコ会札幌修道院はドイツ・フルダ（テューリンゲン）分管区の母院で旭川、釧路、北見は子院と言う体制でした。

旭川地区の教会体制（小教区）もほぼ整い、各教会には殆ど司祭が在勤していました。

分管区長は札幌北十一条に在勤し、司祭会議のたびに小教区司祭は札幌まで、遠い所では半日以上費やして出向いていたのです。

久々に兄弟に会える、ドイツ出身の司祭であれば、使い慣れない日本語より、ドイツ語で思いう存分話が出来る、相談が出来るという歓びもあったでしょう。

当然、告解（ゆるしの秘跡）もあったでしょう。告解は言葉が通じない方が良かったかも知れませんが・・・。

全国的には急速にインフラ整備が進み、スピードの時代と言われていましたが、北海道はまだまだ先の話であり、当時の交通状況は、札幌に出掛ける事は大変な労力と時間の浪費でした。

兄弟の中から自然と、旭川辺りにセンター的機能を持った修道院があったらとても便利になるね、と言う意見が次第に大きくなってきていました。

四名の建築委員会を発足

その想いを受けて、発足日は定かではありませんが、旭川地区に在籍していたローター・ポレンバ師、ドミニコ・バウア師（会計を担当）、ウルバン・サワビエ師、ルペルト・ミューラー師の四名による建築委員会が発足し四人の考えを話し合い、得意分野を発揮して活動を開始しました。

判明したのはドミニコ師が会計を担い、その後の修道院の会計を長い期間務められました。

順序は異なりますが、フルダ管区との資金調達を含めた現状分析、土地の確保、建物の概要及び設計案と予算案、建物の使用目的（修道院、教会、納骨堂、黙想の家）等、膨大な仕事量を担いました。

残っていた記録から次のような流れが推察されます。

一九六〇年、浅井晴雄師が分管区長ビルゲル・ナーゲル師に土地の手配を託されました。

一九六三年二月二七日（灰の水曜日）ローマからフランシスコ会総長アウグスチノ・セペンスキー師が来日、旭川に修道院付きの教会を建てると言う事が案件の一つとして提案されたものと思われます。

その間に、最初の候補地として神楽の土地を確保していました。が、国道に遠い等の点で少し問題があり結局神居に現在地を見

つけ購入につながりました。先の神楽の土地は一九六三年設立の「聖ヴィアンネ会」「旭川白百合幼稚園」創設地となりました。

当初、旭川白百合幼稚園はフルダ管区の経営でしたが、一九六三年聖ヴィアンネ会の設立に合わせ一九六六年四月にフルダ管区より聖ヴィアンネ会に経営を委託されました。

一九六六年四月、ドイツ・フルダ管区（ヘッセン州）より管区長のベタ・シュミット師が来旭し視察を行いました。

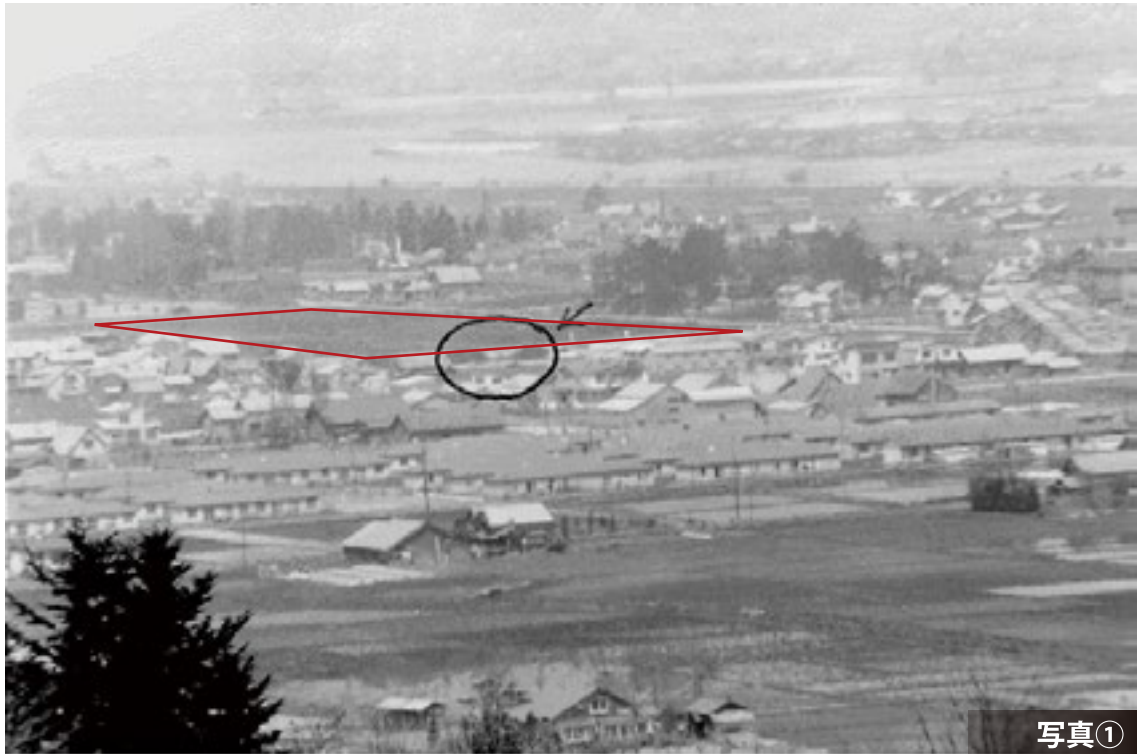
カトリックセンター構想に合わせ検討した結果、予算額は九千万円（土地、建物込み）と決定しました。

ほぼ全額の寄付をドイツ・フルダ管区に頼りました。

当時の金額を最近の消費者物価指数にすると、おおよそ四・一倍となります。

建築資材は更に高騰しており、現在の金額に換算すると推定五億円前後と思います。

それでは、やっと見つけ出した写真で当時を振り返って頂きたいと思います。転写が多く、画像が見えにくいものもありますが、ご容赦下さい。



写真①

写真① 伊ノ沢か観音台辺りの山に登って購入したばかりの平地（○印の後の四角い空き地）を撮影した写真です。

手前中央に見える平屋の長い家屋は建替え前の市営住宅群です。

遠目に見ると家が沢山あるように見えますが、街灯も少なく、まだまだ閑散していました。

この土地は当時神居周辺を開発していた開発会社が喉から手が出るくらい欲しがっていた魅力ある土地でしたが、何年にも渡り地主が頑として販売しなかった土地でした。

まさに主が確保してくれていた土地、ルペルト・ミューラー師が一九六五年に見つけ、フルダ管区長エマヌエル・ゼントグラフ師に勧め、地主と約二年間の歳月をかけた交渉の上購入が実現しました。

この土地を、と言う願いの一つとして高砂台の山の中腹の旧墓地に近しいと言う事もありましたし納骨堂建設構想も併せて持っていました。

神居の山には百年以上からの旧墓地と、更に少し上には六〇年程前に確保した新墓地を保有していましたが既に日本では土葬から火葬が主流となっていました。

高齢者も増え旧墓地、新墓地への御墓参りは足元がおぼつかない人も目に付いてきていました。

聖母の被昇天（日本ではお盆）での御墓参りもカトリックセンターがあることによって最後は一同で一緒に祈れると言う理に適う所だったのです。

写真②Ⅱイエスの言葉…マタイ十六章十八節『あなたはペトロ（巖）私はこの巖（いわお）の上に教会を建てる。陰府の力もこれに対抗できない』

一九二一年～一九六八年の間に沢山の教会を建てました。司祭の心の支えとなったのは右の聖書の言葉でした。



写真②

残雪が見えるので一九六七年初春と思われます。エマヌエル・ゼントグラフ師の司式により工事前の神居の地に祝福式が行われました。

浅井晴雄師、佐藤敬一師（後の新潟教区司教）、ドミニコバウア師が判ります。

この時、イエスの取り次ぎを願う『聖ヨゼフ（大工）』のメダイがこの土地の何か所？かに地中深く埋められました。（探さないで下さい）



写真③

写真③Ⅱ一九六七年建築を始めたばかりの聖堂と修道院の足場と基礎が伺えます。

旧国道十二号線（現在は道道九〇号旭川環状線）から撮影されています。

当時は、周りを遮る建物は少なく、神居教会から神居小学校まで見渡すことができました。

また、現在札幌から旭川市内への入り口となっている旭川大橋も工事中で完成しておらず、旭川市内や稚内、北見方面に向かう車は全てこの旧国道十二号線を通り神居十字街交差点を左折して行く大動脈道路でした。



写真④

写真④ Ⅱ一九六七年初冬と思われます。

やはり旧国道十二号線から撮っています。広範囲を見渡せます。

雪解け初めの冷えた朝には堅雪となり、ショートカットで教会に行く事が出来ました。

教会と修道院の内装工事を行っています。黙想の家部分は翌年の工事となっています。

写真⑤ Ⅱ一九六八年建物外観全体が出来て来ました。工事の足場を外し片付けている様子です。



写真⑤



写真⑥

写真⑥Ⅱこの頃は春の訪れと共に毎日が楽しみでした。

内装工事中で未だ完成ではありません。シンボルの十字架も設置していません。

国道十二号線は舗装されていたと思いますが、修道院の周りは写真で見えるように何年もガタボコ道でしたし、納骨堂も樹木はありません。

内部については、体形の大きなドイツ人司祭の設計なのか？と思いますが、階段の段差の高さは一般より高く、手の大きな人用の手摺の頑健さが、いわゆるドイツ風でしょうか。

当時、バリアフリーと言う言葉はあったのですが、未だ国民には浸透していませんでしたし、建築に考慮されていませんでした。

現在は、エレベーターを増設し、階段には高齢者、女性、子供達も握りやすい手摺を設置しています。



写真⑧



写真⑦



写真⑨

写真⑦⑧⑨ コートを着
てるので一九六八年四月頃
だと思っています。

内装が終わったばかりの
出来立てホヤホヤの聖堂の
見学、点検、確認の一コマ
でしょう。中央の大柄な方
は佐藤敬一師、右後ろにル
ペルト・ミューラー師が判り
ます。

この後、内陣と入退堂通
路に真紅の絨毯が敷かれま
した。

内陣には未だ聖櫃も祭壇も
ありません。

特注していた信徒用の長
い椅子は材料の不足で二台
くらいしか献堂式に間に合
わず、七ヶ月位待ちました、
信徒の自宅や黙想の家から
座布団を持ってきて座って
ミサに授かりました。

.....



写真⑩

写真⑩ 一九六八年八月二十五
日、富澤司教様をお迎えして厳かに
献堂式が行われました。

建物全体、駐車場、中庭全体に灌
水と献香が富澤司教の手によって取
り行われました。



写真⑪ Ⅱ 珍しい聖堂の初期の写真です。旭川地区兄弟の初ミサと思われます。十字架、聖櫃、祭壇、照明共に現在と違います。

椅子もパイプ椅子ですが、当時のニスが剥がれるので現在の長椅子が出来るまでの七ヶ月間座布団にしました。現在の十字架、レリーフの施された聖櫃、祭壇は一九七

〇年～一九七九年までフルダ管区長を務められたジークフリード・クロックナー師が一九七一年頃視察に訪れ寄贈された物と思われます。
ジークフリード管区長の兄上とドミニコ神父様の兄上はアルツフェルトと言う町でドミニコ神父様の親戚の塗料専門の工務店で一緒に働いていました。



献堂式ミサ

写真⑫ Ⅱ 内陣左手前から献堂式ミサに授かる司祭、修道士、信徒の皆さんです。感謝と、感動で涙を流す人が沢山いました。



旭川カトリックセンター落成式で富澤司教の祝辞

写真⑬ Ⅱ 富澤司教様の祝辞の様子です。献堂式の後、修道院、神居教会、黙想の家を『旭川カトリックセンター』として聖堂下の屋外において落成式を行いました。
現在の修道院入り口から撮影されています。隣の町内を隔てる三条通り側にステージがこの日だけのために造られています。

写真 ステージ
右手奥側がこれから建設される納骨堂の方向です。
ステージ下、左に立っているのは、司会進行をした初代信徒会長、番浦秀雄さん（当時四十八歳）です。神居教会発足時の所属信徒数は八十名と記録されています。

写真⑭ II ドイツ・フルダ管区より管区長のベタ・シュミット師をお迎えして御祝辞を頂いています。通訳をしておられるのはニコラオ・プレッシエル師です。



写真⑭



写真⑮

写真⑮ II 御挨拶をする分
管区長（初代修道院長）
ローター・ポレンバ師です。

当時札幌北十一条教会内に
所在したフルダ分管区を
旭川に移し、それまで札幌
で行われていた司祭会議を
旭川で行えるようにし、各
小教区の司祭の移動の労力
を軽減しました。

修道院体制としてはフラ
ンシスコ会札幌修道院が母
院となり、旭川、釧路、北
見を子院としての体制が続
きます。



写真⑬

写真⑬ Ⅱ当初は富澤司教様の献堂式のミサ写真と
思いましたが違いました。

ドイツから贈って下さった十字架、レリーフの施され
た聖櫃、祭壇が設置され祝福で来られたと思われま

す。あるいは、富澤司教様も度々黙想会で黙想の家を使わ
れました。その時のミサではないかと思えます。背面の
真新しい白壁が輝いているように見えます。

Das »Catholic Center« erfreute sich bald regen Zuspruchs. Künftig trafen sich hier die Missionare zur ihren monatlichen Pastorkonferenzen. Damit entfielen die langen Anfahrtswege nach Sapporo. Auch andere Gruppen, wie zum Beispiel die niederländischen Mitbrüder oder Bischof Tamizawa, nutzten das schöne Haus für ihre Konferenzen oder Exerzitien.⁷²

初代管区長ローター神父様の喜びの言葉（ドイツ語）

上記のドイツ語は、テューリゲン（フルダ管区）
向けにドイツ語で書かれた『フランシスカン日本
宣教百年、一九〇七年〜二〇〇七年字』の本の中
から見付かった初代管区長ローター神父様の喜び
の言葉です（ドミニコ神父様提供、マンフレード
神父様訳）フィリピン在住佐藤宝倉神父様インタ
ビュー中に偶然見付けて下さいました。

【訳】

カトリックセンターは、素晴らしい建物で、建
築後まもなく、よく色々な人に使われる事になり
ました。

旭川地区の宣教師たちの毎月の司牧例会は、こ
のセンターで行われています。

それによって札幌までの長い距離の移動による心
配と苦労は、楽になりました。

その他に別な宣教師たちのグループ、例えばオ
ランダの宣教師たち、また富沢司教様は、この素
晴らしい家を、集会あるいは黙想の為に使われま
した。



写真⑰

写真⑰ 一九七一年頃の日本のフルダ管区の兄弟の集合写真です。

大半が道内で活躍されてる兄弟で、当時東京瀬田におられた、福田師、堀田師、石井師、福岡におられたルカ・ベルトラム師が写っています。

中段、中央左寄りにローター・ポレンバ師と佐藤敬一師（後の新潟教区司教）に挟まれている身長の高い方はドイツ・フルダ管区から来旭されたジークフリード・クロックナー管区長（一九七〇～一九七九）です。国内のフルダ管区の兄弟が集まったものと思います。

ジークフリード管区長の兄上とドミニコ師の兄上はフルダの近くのアルツフェルトと言う町でドミニコ師の親戚が営む会社と一緒に働いていました。

中庭を散歩されていたドミニコ神父様に聞いてやっとわかりました。生き字引です。

写真⑱ 献堂式のためにドイツから来られたベタ・シュミット管区長とローター・ポレンバ分管区長を中心に第一回目の司祭会議の様相です。修道院内の司祭会議の写真は中々見られません。皆さん、歓びに溢れているように見えます。嫌煙時代前でテーブルの上には灰皿もありますね。



写真⑱

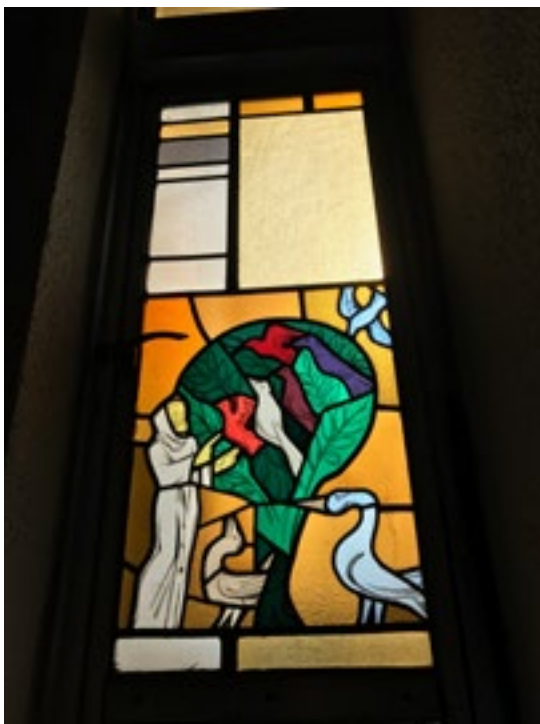


写真⑱

写真⑱ 一九七一年頃の司祭会議での集合写真と思われます。

(長尾神父様提供)

左から、渡辺義行師、ルペルト・ミユラー師、続橋和弘師、ヤヌワリオ・(アロイスメンラード) 師、山岸修道士、武宮雷吾師、長尾俊宏師、鈴木宗太郎師、青木孝由師、佐藤修道士、分管区長ローター・ポレンバ師、ウルバン・ザワビエ師、松田修道士、ドミニコ・バウア師、小川満師、マンフレード・フリードリッヒ師、浅井晴雄師、山野井克栄師、ヒラリオ・シュミット師、ニコラオ・プレッシエル師、秋元春雄師、テオドル・シーベル師、竹本茂師です。





写真上 二〇一七年十月三日、村上管区長をお迎えし、師父フランシスコの帰天祭での集合写真です。

左から、山本師、曾根修道士、間野地区長、阿部師、村上管区長、ドミニコ師、長尾師、ナルチゾ師、ヒラリオ師、戸田師、マンフレード師。

